



平成がスタートした平成元（1989）年に、大竹市では史上空前、そしてもう二度とできないような大きなイベントが開催されている。「みんな起きろ！」をキャッチフレーズに、小方沖海面埋立事業により誕生した広大な土地（現在の晴海地区のうち、晴海臨海公園やコメリ、トライアルがある地域を除いたエリア）で、9月16日の午後5時から翌17日の午後5時までの24時間ぶっ通しで開催されたマラソンイベントである。

まちの元気を取り戻したい

このイベントが企画された時代背景を知るには、昭和の後半までさかのぼらなければならない。念願の市庁舎が小方に完成した昭和55（1980）年、地元企業で最大だった大竹紙業が過剰な設備投資が原因で約320億円の負債を抱えて倒産した。これは石油化学コンビナートを中心に広島県西部の企業城下町として発展してきた市に激震が走る出来事であった。

折からの強風にあおられてしまい、つり下げ後30分足らずで巨大鶴は破れてしまったのである。はかない鶴の一生であった。

そのほかステージではダンスや舞踊が披露され、カラオケ大会もあり、ハワイ旅行をかけた大ウルトラキズではすべての問題が、大竹に関する問題だった。

ミニSL、ミニゴーカート、ミニ四駆レース、サラブレッド乗馬、アニメシアターなど、「子ども遊遊ランド」は、会場を訪れた子どもたちにとって一日だけの遊園地だった。さらに55店舗が出店した「わくわくバザール」は、終始盛況で、会場を訪れた4万5千人の憩いの場としての役割を十分果たした。

圧巻だったのは「シンボリック協賛イベント」部会が担った、ヘリコプターの遊覧飛行（有料）、スカイ・スタント・カイト・ショー、豪華クルーザー、モーターボートの体験航海などであった。二度と行われないうような盛りだくさんのアトラクションは来場客を喜ばせた。

また、70cm×2000mと90cm×1200mの2種類のロール紙を、出来上がったばかりの道路（現在の小方港からゆめタウン方面への広い道路）に広げ、「ちびっ子ウルトラ絵描き大会」が子どもたち667名の参加で行われた。これは「紙」を

その後、会社更生法の手続きを経て、倒産以来14カ月ぶりとなる昭和57（1982）年2月から上質紙などの生産を一部再開し、大竹紙業問題が一息ついたところ、同年11月18日の日本経済新聞のトップ記事で「三井東洋化学大竹工業所が閉鎖か？」という衝撃的なニュースが、再び企業城下町を駆け巡ったのである。この三井東洋化学大竹工業所撤退問題は、国内石油化学工業の再編が絡んだ大きな問題であり、大竹市は経済的に大きな影響を受けた。大竹市の昭和時代の終焉は、昭和50年ごろから続く人口減少の加速化が進み、まさに活気がなくなり始めていた時代であった。

市制施行70周年連載企画

振り返る70年

問い合わせ
企画財政課 ☎59-2124

第8回 史上空前のイベント

エキサイティング ウェーブ イン オオタケ

『EXCITING WAVE IN OTAKE '89』

「みんな起きろ!」でマラソンイベント

昭和の末期、市内の大企業が倒産、撤退。大きな衝撃をまちに与えました。そんな中、まちを元気にしようと市民が立ち上がり、24時間の大規模イベントが開催されました。

大竹のシンボルとしてとらえ、シンボルの「紙」に子どもたちの夢ある作品が絵巻物のごとく描かれた。フィナーレは神尾徹生市長（神尾氏は翌平成2年に退任した）を中心に「We Are The World」を会場全体で熱唱、大いに盛り上がったのである。

たな土地が誕生したのである。大竹商工会議所青年部では、この広大な埋め立て地で住宅地をはじめとした開発が始まる前（平成2年から住宅地の販売が予定されていた）のわずかな時間を利用して、沈滞ムードのまちに元気を取り戻すきっかけを作れないかという議論が自然発生的に起きていた。

平成元（1989）年6月初め、30代から40代を中心とした商工会議所青年部や青年会議所、各労働組合、PTA連合会、ベンチャークラブなどの市内のさまざまな団体の代表が集まって、議論を重ね計画されたのが「EXCITING WAVE IN OTAKE '89」という一大イベントだったのである。

平成2（1990）年からは、一部が住宅地として販売開始が予定されており、年内にしかも寒くならないうちに開催しなくてはならないという制約もあり、開催日は9月16日（土）から17日（日）に決まった。開催まで3カ月しかないという過酷な条件を覚悟しての決定である。しかも実際に実行委員会が立ち上げられたのは7月初めであったので、開催までの時間は2カ月余りしかなく、市も、企業も、各種団体も含め市民全員で、大きなイベントの開催・成功に向けて一丸となって準備を進めていったのである。

4万5千人が来場！史上空前のイベント

運営組織は、「総務」「メインステージ」「ワクワクバザール」「子ども遊遊ランド」「シンボリック・協賛イベント」の5つの部会からなっており、ボランティアスタッフの登録者数は総勢1111人、イベントポスターのデザインをプリントしたTシャツを着て運営に携わった。

「メインステージ」では、当時人気絶頂だった歌手本田美奈子（故人）のステージが19時30分から21時まで繰り広げられ、1万人を超える観客によるバリエードを破らんばかりの熱気が会場を包んだ。その後、花火やビンゴ大会、オークションが行われ、9月17日午前3時30分からは「真夜中のシンポジウム21世紀の大竹を語る」が午前6時まで開催され議論が交わされた。午前6時からは「ギネスに挑戦！ジャンボ折り鶴」が行われた。ロール紙をカットして貼り合わせ30m×15mの2枚の紙を作り、2000人で重さ600kgの折り鶴を4時間かけて作り、消防自動車とクレーン車を使ってつり下げられた。羽の下には、建設現場で使われる足場が組み立てられていて、羽を支えていた。空に羽ばたいている巨大な純白の折り鶴の姿は壮観であった。ところが、突然の不幸が訪れる。

他人まかせで町おこしはできない

昭和時代が終焉し、新しく平成時代がスタートした年に、郷土大竹市では、行政主導ではなく、市民主導型の全市挙げての大きなイベントが行われたのである。そして、その後このような壮大なイベントは開催されていない。

イベント終了直後の平成元（1989）年9月19日の中国新聞の朝刊「天風録」には次のように記されている。

「合言葉『みんな起きろ!』は街の元気回復を担ったものである。無論、市民にとっては初の経験だ。夕方五時から翌日のその時刻まで、催しの長距離リレー。完走をかけて二十歳代から四十歳代までの「元気印」の男女が準備に奔走。悩める地方小都市の再生を信じて、おカネを集め、知恵を絞り、当日は汗を流した。市も応援の旗を振った。中略、催しへの参加のべ4万5千人は市の人口をしのいだ。潜在エネルギーは実証された。多少の試行錯誤はあっても、志ある市民が力を合わせた過程は尊い。教訓―他人まかせで町おこしはできない。」

※「We Are The World」

1985年にアメリカで発売された歌で、有名なアーティストが「USAフォー! アフリカ」として集結して完成させた。



（上右）100人のテープカットで開会（上左）「真夜中のシンポジウム」はテレビで深夜生中継された（左）フィナーレは「ウィー・アー・ザ・ワールド」の大合唱。

ギネス登録を目指したジャンボ折り鶴。